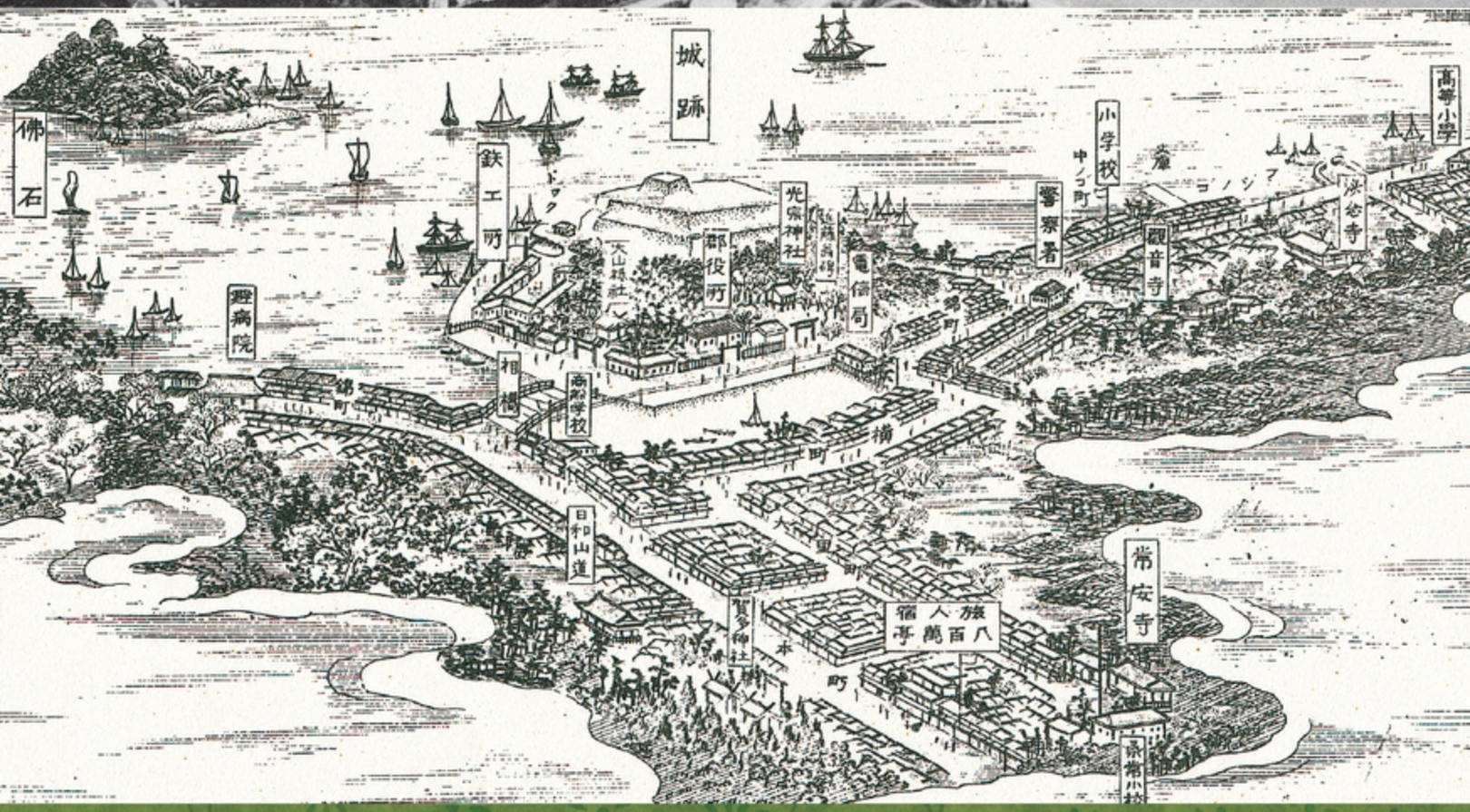
鳥羽商船高等専門学校 http://www.toba-cmt.ac.jp

学校だより

Vol. 74
2011
SUMMER

平成23年7月発行　鳥羽商船高等専門学校
広報・公開委員会「広報誌専門部会」
三重県鳥羽市池上町1番1号　TEL 0599-25-8013

【特集】創基130周年記念



- 学生活動の紹介
- 鳥羽商船における地域防災活動について
- 新任挨拶
- 公開講座
- 学校通信
- 人事異動

鳥羽商船創基130周年を迎えて

校長　藤田　稔彦

はじめに、本年3月11日に発生した東日本大震災によりお亡くなりになった方々に謹んで哀悼の意を表します。また、被災された多くの方々に心よりお見舞い申し上げます。

本校の前身である攻玉社分校・鳥羽商船黌は明治六大教育家の一人、近藤真琴翁によって1881年8月20日に創立され、今年130周年を迎えます。また、今年は翁の生誕180周年にも当たります。これまでの本校の歴史は「百年史」（1981年）や「学校だよりNo.54」（創基120周年記念特集号、2001年）に記されており、本文では主にそれ以後の本校の状況について述べます。

1、本科および専攻科の構成

本科の学科構成と入学定員は、時代の要請に合わせて変わってきました。高校から高専になった1967年は商船系のみの「航海学科40名＋機関学科40名」でしたが、1969年に定員増、1985年に改組が行われ、1988年に現在の学科構成「商船学科40名＋電子機械工学科40名＋制御情報工学科40名」になりました。また、大学卒と同じ学士の学位が取得可能な専攻科「海事システム学専攻4名＋生産システム工学専攻8名」が2005年に設置されました。なお、女子学生の入学は1985年から始まり、任意寮制への完全移行（商船学科1、2年生全寮制の廃止）は2006年でした。

高専制度は、産業界の要請を受けて1961年に創設され、今年50周年を迎えます。また、全国の国立高専は、独立行政法人国立高等専門学校機構法（平成15年7月法律第113号）により、2004年4月から国立高専機構（独立行政法人国立高等専門学校機構）に束ねられました。国立高専機構では、第二期中期計画の柱に高専の高度化、すなわち産業構造の変化や技術の高度化などの時代の進展に対応し、各高専がそれぞれの特色を維持し発展させながら、自主・自律的な改革を進めることを掲げています。本校でも、入学志願者（特に女子学生）の増加対策や鈴鹿工業高専との連携なども視野に入れ、今後5年間の教員採用計画とリンクさせながら学科再編・カリキュラム改革を実施していきます。

2、鈴鹿工業高等専門学校との連携

鈴鹿工業高専とは、2006年10月に当時の国立高専機構理事長からの要請を受けて「統合再編検討委員会」を設置し、2009年9月に「連携強化に関する基本方針」を定め、2010年3月に「連携協力及び共同事業の推進に関する協定書」を交わしました。そして2010年8月に新たに「連携強化推進委員会」の設置を決め、その下に「連携推進部会」と「連携強化活動プロジェクト部会」を置いて、共同で各種事業を企画・実施しています。

3、校舎、学生寮、練習船等の施設整備

建築基準法施行令改正（1981年6月）による新耐震基準に適合するように、本校でも2005年10月に1号館、2008年3月に2号館が改修されました。また、2007年3月に4号館（専攻科棟）が新築されました。

学生寮は、暁寮のA棟とB棟がそれぞれ1996年3月、1999年3月に改修されましたが、入寮希望者が年々増える傾向にあり、多目的室や研修室を居室に改修するなどの対策を進めています。また、最近は授業日程や体育大会、インターンシップ等の学外行事との関係で、多くの高専が夏休み期間を8月の旧盆前後から9月末頃までとしており、本校もこれに倣う予定で、暁寮居室へのエアコン設置計画を進めています。そのための電源工事は本年度中に完了します。

旧白菊寮は現在も建物の一部を暫定的に課外活動や実験研究のために使用していますが、ほぼ閉鎖状態です。2010年4月にこの旧白菊寮の改修再利用計画案がまとまり、概算要求を行っています。

練習船鳥羽丸（3代目、1994年8月竣工）は、学生実習等にフルに活用されていますが、データロガーシステムの修理など、装置の経年劣化対策が急がれます。

京浜会館は、機関学科の工場実習のために1989年まで学生宿舎（京浜寮）として使用され、1994年に改修後、2006年まで宿泊施設として運営されていましたが、建物の老朽化が進み、このほど文科省と財務省の交渉により売却処分が決定しました。この土地と建物は、もとは鳥羽商船同窓会からの寄付によるものです。なお、同窓会は2010年4月より本校百周年記念資料館1階に事務所を置いています。

4、学生の課外活動と各種コンテスト

東海地区高専体育大会などにおいて、優秀な成績を収めて全国大会に出場するような個人や部も出ています。カッター部は本年7月24日に鳥羽で開催される全国商船高専漕艇大会で5連覇に挑みますが、この10年間に7回優勝の実績は立派です。

高専ロボコン（ロボットコンテスト）には本校も毎年出場していますが、最近では2004年の東海北陸地区大会優勝・全国大会ベスト8以外は全国大会出場に一歩及ばず、今後の奮闘を期待します。

本校は全国高専プロコン（プログラミングコンテスト）の課題部門、自由部門で毎年のように特別賞や敢闘賞を受賞し、競技部門でも常に上位に進出しています。とりわけ2002年と2005年に課題部門で文部科学大臣賞最優秀賞を受賞したのが光ります。

また、本校は衛星設計コンテストでも2005年と2006年に2年連続でアイデア大賞を受賞するなど、2003年以降ほとんど毎年受賞しています。

5、その他、寮問題、国際交流、外部評価など

2008年の4月から10月にかけて暁寮で1年生の寮生12人が上級生から暴行やいじめを受け、退・離寮していたことが12月18、19日に新聞・テレビで大きく報道されました。暴行した上級生4人は厳しい処分を受けましたが、この問題は根が深いとの判断から、教員、保護者、外部の有識者からなる「学寮問題諮問委員会」を立ち上げ、さらに「学寮問題対策ワーキンググループ」を設け、改善に取り組んできました。その後、寮生会を中心とした寮生自身の努力もあって、改善が進んでいます。

本校は2008年8月にSP（シンガポール・ポリテクニック）のSMA（シンガポール・マリタイム・アカデミー）と学術交流協定を結び、SMA乗船実習や年3回のSP英語キャンプに毎回数名の学生が参加しています。また、2010年11月に商船学科を持つ5高専がハワイ大学KCC（カウアイ・コミュニティ・カレッジ）と交流協定覚書を交わし、昨年度のKCC国際インターンシップには本校からも5名の学生が参加しました。

本校では、それまでの自己点検評価や外部評価の不備を解消すべく、2005年度に外部有識者委員による運営諮問会議を発足させました。また、2006年度には大学評価・学位授与機構による機関別認証評価を受け、次回の評価に向けて教育研究体制の一層の充実を図っています。その他、工学系では懸案のJABEE認定プログラムの取得、商船系ではSTCW条約締約国会議（2010年6月、マニラ）で採択された改正条約への対応など、今後解決すべき問題があります。

終わりに、創基130周年を迎えて、鳥羽商船同窓会を始め、本校の教育研究活動に日頃から多大なご支援をいただいております関係各位に改めて感謝申し上げます。

商船学科に求められる学生

商船学科長
石田　邦光

商船学科は本校創基以来130年、本学の看板学科であり、一途に商船教育に邁進してきた学科です。学生を送り出すべき海運業は、陸上の企業と同様、日本の経済変化に左右されますし、さらに世界経済状況の影響を強く受ける業界でもあります。このため、就職については、学校や学生の努力だけではいかんともしがたい事実もあります。

しかしながら、今日、日本人船員の不足がクローズアップされ、国家的な重大問題であると認識されています。一方、長く続いた海運業界の低迷により、船員という職業が庶民の脳裏から消えつつあります。このため、商船学科を目指す中学生を募ることは、非常に難しくなりました。そこで、数年前から始めた募集PRの全国展開を今後とも推進していく予定です。また、現在、最後の1年間で大型練習船実習を行うことになっていますが、学生が自己の適性を見極めるためにも、座学途中での短期大型練習船実習を導入すべく検討中です。

そうした中で、学生に求められる能力や資質も大きく変化してきました。今や、船舶職員として採用されても、在職期間の半分近くは陸上勤務での活躍が期待されています。陸上勤務は昔もあったことですが、これからの学生に求められる能力や資質は陸上社員（多くは一流大学出身者）と肩を並べて仕事が出来ることであり、マネージメント力もさることながらレベルの高い英語によるコミュニケーション能力です。当然ながら、陸上での仕事には船員としての経験が重視され、その経験を十二分に活かすことが求められます。そして、与えられた職務に対する迅速かつ適切な判断力と解決能力が常に問われることになります。

こうした送り出すべき学生像を視野に入れながら、商船学科においては、国際性を身につけさせるプログラム（海外研修など）、英語力を身につけさせる新たな取り組み、そしてキャリア教育の充実を図っていきたと考えています。

商船学科・機関コースの「これまで」と「これから」

商船学科・機関コース主任
伊藤　友仁

本校に赴任して十余年が過ぎたばかりなので、今回のテーマである機関コースの「これまで」と「これから」、即ち機関コースの昔の状況や未来予測を述べることは私には荷が重いと思います。そこで、日頃思っていることを簡単に述べさせていただきます。

以前、企業で材料開発に携わった関係上、本校へ赴任した頃に大型船舶の材料を調べたことがありました。そこで分かったことは、船の材料は鉄系の極めて保守的な材料ばかりで、決して最先端の材料ではないということでした。大型船舶では、設計品質を満たす製造技術と機関士等による日頃の維持管理技術が極めて重要なことを理解しました。

さて、過去十年以上、機関コースの卒業生は陸上就職が比較的に多かったのですが、最近は徐々に海上就職が増えてきました。近年は二級以上の海技試験（筆記）にチャレンジする学生が増え、海上就職を希望する学生が多くなってきました。これからの機関コースの学生は、ぜひ船舶の機関士を目指し、上級の海技試験にトライしてほしいと思います。そのためにも、低学年のうちから基礎科目の勉強を真面目に取組んで、クラブ活動などで十分な体力をつけてください。

私は本校で、衛星設計コンテストの指導をしております。実は、宇宙ステーションを構成する材料は保守的なものばかりで、その理由は、古くて実績ある材料ほど信頼性が高く安全だからです。これは、ある意味で前述の船舶材料と共通する事で、たとえ旧来の一般的な材料でもそれがもたらす社会的な役割や成果は最高のものではないでしょうか。「これまで」も「これから」も、機関コースを巣立っていく学生達は、ぜひ社会に希望の光をもたらす存在であって欲しいと思います。

これまでの鳥羽商船、これからの鳥羽商船

電子機械工学科長
桐山　和彦

私が本校に赴任したのは昭和60年（１９８５年）で、今年で 26年目になります。25年は四半世紀と呼ばれ、歴史を検証する転換点として位置付けられます。この間、本校も商船学校から「工業高専」へ苦渋の決断を強いられてきました。当時の学生の多くは全国各地から集ってきて、学生気質も質実剛健を旨とし、中には極めて優秀な学生もいた個性派集団でした。個性派集団から地域文化の共通した地域集団への変化は教育活動にも大きく影響したと思います。一方、就職については、バブル崩壊後の氷河期を除き、これまでは比較的恵まれた時期であったと言えます。しかし、リーマンショック以降は求人があるにもかかわらず困難な状況が続いています。国内市場の収縮とグローバル展開の中、限られた人材枠をできるだけ有効に活用したいという企業側の思惑を見ることができます。

現在、本校は世代交代の時期にあります。この四半世紀に遂げた変化は必ずしも主体的に行なった結果ではありません。その結果、多くの矛盾をそのまま内包したまま現在に至っています。まず行なうべきは既得権の維持を捨て、今後の四半世紀の展望に立った理念を提示することです。商船に拘らず今後の日本の工業基盤を支える技術者の養成を目指し、全学一団となって取り組む必要があります。企業参加の教育による、「面接・人物重視」の採用から、学力・教育成果重視の採用への転換、「公共」と「貢献」を理念とする地域社会に根差した研究は本校が社会的な尊敬と敬意を持って迎えられる礎となるものです。いずれにせよ今の決断が今後の本校の動向を大きく左右することは言うまでもありません。重大な転換点に立っていることを十分に認識し、各自一致協力して取り組めば自と未来は開けてくると確信します。

制御情報工学科・過去と現在

制御情報工学科長
榎本　隆二

昭和63年4月、航海学科（定員40）と機関学科（同前）が改組され、商船学科（同前）と工業系学科として前2学科とは継承関係を持たない制御情報工学科（同前）が誕生した。そのころ、少なからぬ工業高専において、2クラス（定員80）の機械工学科を機械工学科（定員40）と制御情報工学科（同前）に分離するという改組が行われている。多くの高専において、この「制御情報工学科」という名称は名ばかりで、単に情報工学付きの機械工学科であったり、生産工学寄りの機械工学であったと記憶している。

本校の制御情報工学科は、情報系科目と制御系科目が1対1の割合で組み合わされているという意味で愚直なまでに名称に忠実であり、さらに制御系科目は電気電子工学、機械工学および制御工学の科目の割合がほぼ1対1対1となっているという美しいほど理想的な構成であった。制御工学はある意味で数学の塊である。線形化問題、線形微分方程式論、複素関数論、ラプラス変換、フーリエ変換、ベクトル微分方程式、線形代数学などを駆使する。また、制御工学は電気電子システムや力学、流体、熱などの機械系システムだけでなく、生態系や生物系なども検討対象とするという境界領域の学問である。茨の道なのである。

その後、2回のカリキュラム改訂がなされたが、上述の比率はほぼ継承されている。しかし、教授陣の構成は少し変化し、9名（専攻科生産システム専攻担当を含めれば10名）のうち、3分の2は組み込みシステム寄りの情報工学・制御工学系の研究者である。組み込みシステム関連の研究者がこれだけ揃っている学科は全国的にも珍しく貴重な存在である。その一方で、本学科の卒業生がこの分野に関して夢や将来展望を語れるかというと、必ずしもそうなっていないと認識している。その前に、我々の専門分野が好きでなければならない。なぜ、皆が好きになってくれないのか。現在、学科をあげて思案中である。

現代人のリテラシー

一般教育科長
冨澤　明

一般教育・物理の授業では、鉛直ばね振り子が出てきます。鉛直ばね振り子とは、つるまきばねの一端を天井などに固定し、下端におもりを取り付けて宙につるしたもので、ばねの力と重力との作用でおもりが鉛直線上を上下に振動する装置です。さて、この振り子のおもりをいくらか上に持ち上げた後、速さ0m/sで手を放して落下させると、ばねはいくら伸び縮みするでしょうか？この問題は、力学的エネルギー保存則と呼ばれる物理法則が成り立つと考えて解くことができます。最後には、数学的に2次方程式を解くことになりますが、そこで得られる2つの実数解はどちらも、物理的な意味を持っています。数学など、科学の素養は、たとえ生活の糧に直接は結びつかなくても、私たちに新しい情報や考え方をもたらしてくれたりします。

また、科学的な知識を持っていることが適切な判断を下す一助となり、次の行動に結びつくこともあります。放射線の被曝量による健康への影響について、正確な情報提供が望まれる理由の一つではないでしょうか。

リテラシーとは、元来「識字」を意味する言葉だそうです。読み書き能力が広く普及することによって、出版物を介して短期間のうちにより多くの人々に、新しい知識や思想が伝わるようになりました。いつの世でも、人々全体の教育水準が上がることによって、さらに新しい時代が創り出されてきました。

現代のリテラシーの代表格は「情報（処理）」です。しかし高専生に求められている基礎能力は他にもあります。母国（日本）語による適切な表現力、英語によるコミュニケーション能力、科学するための素養、など。学生の基礎能力向上に向けて、一般教育を含め学校全体で取り組むことが求められています。本校創立130周年を迎え、時代に応じた新しい教育環境創造の機会が来ています。

専攻科・新しい技術者養成を目指して

専攻科長
坂牧　孝規

専攻科は、平成17年に設置された本校で最も新しい技術者養成課程です。専攻科は、海事システム学専攻、生産システム工学専攻から構成され、本科（商船学科5年半、工業系5年）の教育を基盤に、さらに専門的な技量・見識を身につけるための2年間のコースです。専攻科を修了した学生は、四年制大学を卒業したのと同等と認められ、商船学や工学の学士の学位を取得できます。専攻科では、自分の目で観察し、自分の頭で考え、自分の身体で行動し、結果に自分で責任を持ち、自分はどの様に行動すれば良いかを考えることができる技術者の育成を目指しています。また、専攻科の特別研究では、専攻科指導教員が創意工夫した先進性、社会性、国際性を追求した研究テーマに取り組んでいます。

学生が専攻科で学んだ成果は、就職・進学状況にも現れており、例年100％の就職率を維持しており、既に本年度修了予定学生の就職採用内々定も82％（7月11日）となっています。また、これまで、71名の学士が本校の専攻科を巣立つとともに、東京工業大学大学院、名古屋工業大学大学院をはじめとする大学院に進学した学生も15名となっています。

本校専攻科は、南勢地区唯一の学士の学位が取得可能な高等教育機関であり、地域に密着した技術者養成を使命の一つと考えています。一方で、技術革新、国際化のスピードは一層早くなることが予想され、本科と専攻科の一貫教育を背景に、世界を舞台に、企業の第一線でリーダとして活躍できる学生の育成に対する要望も高くなってくると考えられます。本校専攻科は、商船系および工業系の課程を有する特色があり、専攻間の連携により新たな価値を創造する可能性を秘めています。本校専攻科が、学生の柔軟な発想と若い感性を大切にし、学生の自覚を引き出し、人間味のある新時代の技術者育成の場となれるようにスタッフ一同頑張っていきたいと考えています。

これからの鳥羽商船

総務課企画室
荒木　徹

今回の「学校だよりNo.74」は、130周年記念特集号ということで、来年3月に定年退職を迎える、事務職員の中で最年長の私に駄文をしたためる機会を与えていただきました。

今、社会の大きな変革期に、これからの鳥羽商船には何を求められるのでしょうか。高専全体の方針としては、①社会の産業構造の変化に対応した学科の再編、教育の充実　②高度な人材養成を目的とした社会のニーズに応えるための専攻科の充実　③地域社会や広域での連携機能を強化していくこととされています。また、本校が直面する課題として、①15歳人口の減少　②理科への関心の薄れ　③高等学校の動向の影響（従来の棲み分けが崩れつつある）などにより学生の確保が更に難しくなってきているときに、いかに意欲のある人材を確保するかが重要視されています。

また、本校も先立ち校の4地区高専の統合再編に続き、県内に国立高専が2校ある鈴鹿高専との高度化再編を求められており、新たな新学科設置構想などの検討を余儀なくされているところであります。外部評価委員会では、ユニークらしさを表に出した、本校しかない特色のある学校づくりをすることが、他高専より一歩抜きんでた、お手本ができるのではないかと、助言・提言をいただいております。

さらには、鳥羽市、伊勢市及び志摩市の中央に位置する本校が、地域に根差した学校であるためにはどうあるべきかが問われています。

このような本校を取り巻く極めて厳しい環境の中で、いかにして担うべき役割を果たすことができるのか。そして本校を卒業した学生から、5年、10年、20年以後に、本校に入学、卒業してよかったと思われる「満足度評価」が得られ、鳥羽商船高等専門学校卒業ということを誇りに胸を張って社会で活躍できるような学生を送り出すことが使命だと思います。

これからの鳥羽商船

鳥羽商船同窓会会長
辻　裕

鳥羽商船のルーツは、鳥羽藩士の二男として生まれ明治六大教育家の一人である近藤真琴が東京・浜松町に開設していた航海測量習練所を明治14年・1881年に鳥羽の地に「商船養鳥羽分校」として設立したのが始まりです。私立の時代から、「鳥羽町立鳥羽商船学校」、「三重県立鳥羽商船学校」を経て、1939年に「官立鳥羽商船学校」となり機関科が設置され、1951年に「国立鳥羽商船高等学校」となりました。所管の文部省は1962年に「国立工業高等専門学校」を設置し、さらに1967年に「商船に関する学科の設置を制度化して国立商船高等専門学校五校を設置する」こととし鳥羽商船も「国立鳥羽商船高等専門学校」となり、日本で最も古い商船士官養成機関として現在に至っています。

1985年に初めて工業系の「電子機械工学科」が設置され、三年遅れで「制御情報工学科」が設置されました。航海科・機関科のみの時代には関東・中部・関西圏を擁する全寮制の商船士官養成男子校として全国にその名を轟かせ、幾多の外航船の船長・機関長を輩出してきました。工業系では三重県の地元出身者がメインとなり全寮制がなくなり男女共学となって自宅通学生が大多数を占めるようになりました。

これからのわが同窓会は商船学科中心から工業系に重点が移り、伊勢志摩支部が全国の三分の一以上を占めることになります。電子機械工学科の二期生の出江さん、三期生の江崎さんが母校に戻られて教鞭をとっておられます。同窓会の運営は商船系が主流ですが、これからはお二人に加わっていただいて工業系の方々の活躍を期待したいところです。

母校は国立商船高専に昇格してからキャンパス内外の環境がさらに立派に整備され、風光明媚な池の浦にふさわしいたたずまいとなりました。わが同窓会は伊勢志摩の名門校である「鳥羽商船」を大いなる誇りとし、母校がますます発展されるよう祈念しながら支援・声援を続けてまいります。

みんなの声

❀テーマ❀ 今の鳥羽商船高専について

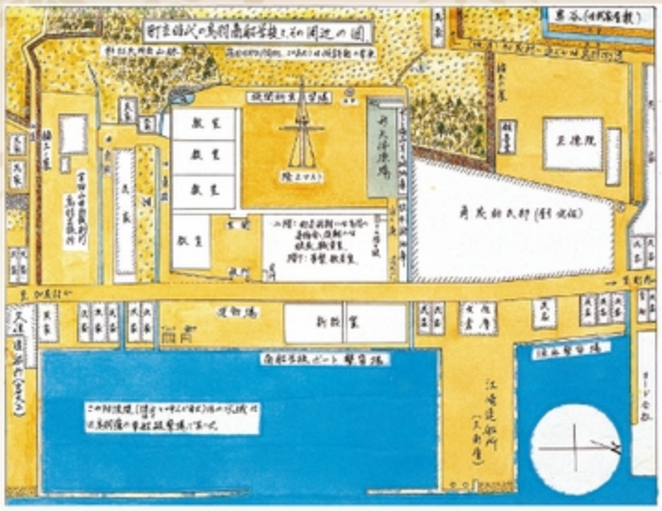
●船乗りを育成するのに良い環境がある鳥羽商船に来ることが出来て良かったです。(S4)●ユニークな教官が多い鳥羽商船です。(M4)●もっと外に目を向けるべき！(I4)●夢に一途な学生が集い、互いに伸ばし合う学舎です。(S5)●就職・進学率がすばらしい(M5)●みんな温室育ちで、プレッシャーに弱いかも。(I5)●勉強と遊びの時間を両立でき、充実した学生生活を送ることができる学校！（専攻科・生2）

❀テーマ❀ これからの鳥羽商船高専について

●130年もの間、守られてきた伝統をこれから入ってくる人たちにも守ってもらいたいです。(S4)●もっと学校行事が盛り上がるようになってほしいです。(M4)●高専としての誇りを取り戻す!!(I4)●全国の子供たちが目指すような学校になるとよい。(S5)●高専でしかできないことを大切にしていってほしい。(M5)●自主性、向上心のある学生が増えてほしい。(I5)●非常に未来のある学校です。就職率100%を維持で！（専攻科・生2）

鳥羽商船高等専門学校130年の歴史

「三重県立鳥羽商船学校全景」（郵便はがき）



町立時代の鳥羽商船学校とその周辺
（現鳥羽市鳥羽４丁目の鳥羽郵便局付近）

「鳥羽商船学校」（郵便はがき）

創基50年記念式典（昭和６年10月）

鳥羽商船高等専門学校　沿革

年月日	沿革
明治14・8・20	東京攻玉社分校、鳥羽商船響開校、初代校長に近藤真琴が就任
28・10・4	東海商船学校と改称
30・6	逓信大臣認可
明治32・8・17	鳥羽町立鳥羽商船学校と改称
40・12・26	三重県会において、三ヶ年継続で校舎新築を可決
43・3	現位置に校舎落成
明治44・4・1	三重県立鳥羽商船学校と改称
昭和14・8・18	文部省告示第三九八号で三重県立鳥羽商船学校廃止
昭和14・8・18	勅令五八六号で文部省直轄学校官制一部改正 鳥羽商船学校を加えられる
15・8	第一期校舎（増築）落成
16・6	第二期校舎（増築）落成
昭和17・1・1	逓信省に移管
18・11・1	運輸通信省所管
20・5・19	運輸省所管
昭和25・12・16	法律第二六九号国立学校設置法一部改正により商船高等学校を加えられる
26・4・1	右記法律施行により鳥羽商船学校を包括して文部省所轄鳥羽商船高等学校となる
26・10・4	創立七〇周年記念式典を挙行
34・9・26	伊勢湾台風により建物（木造）全壊三八三㎡、大破二、三六三㎡
37・3・28	高学年寮（白菊寮）「南寮」落成
38・3・29	高学年寮（白菊寮）「北寮」落成
40・5・25	本館落成
42・3・26	練習船「あさま」（鋼船一八、一六屯）建造
昭和42・6・1	法律第一八号国立学校設置法の一部改正により鳥羽商船高等専門学校となる
42・6・1	昭和四二年度入学の航海学科四〇名、機関学科四〇名、計八〇名は高専一期生となる
43・4・10	昭和四三年度高専第一回入学式（二期生）を挙行
43・11・30	校舎落成
44・4・1	機関学科一学級増により学生入学定員は航海学科四〇名、機関学科八〇名、計一二〇名となる

創基100周年時の本校とその周辺（昭和56年）

練習船　初代「鳥羽丸」
（昭和35年３月～45年３月）

本校全景（平成22年３月）

昭和40年５月25日竣工の本館（現１号館）

独立行政法人国立高等専門学校機構鳥羽商船高等専門学校（現在）		国立（文部省所管）商船高等専門学校時代		
平成16・4・1	独立行政法人国立高等専門学校機構鳥羽商船高等専門学校	45・3・14	練習船「鳥羽丸」（鋼船三二五、六七屯）建造	
17・4・1	専攻科設置（海事システム学専攻、生産システム工学専攻）	45・3・27	低学年寮（暁寮）及び艇庫落成	
18・4・1	商船学科の二・三年の全寮制を廃止し、全科全学年任意入寮制となる	46・3・22	校舎（増築）落成	
19・3・14	四号館（専攻科棟）竣工	48・3・27	図書館及び高学年寮（白菊寮）「西寮」落成	
19・3・26	専攻科　生産システム工学専攻第一回修了証書授与式を挙行	51・2・25	電子計算機室落成	
19・9・19	専攻科　海事システム学専攻第一回修了証書授与式を挙行	56・3・2	実習船「あさま二」（F・R・P・一八、八四屯）建造	
20・8・26	シンガポールポリテクニック、シンガポールマリタイムアカデミーと教育、学術に関する国際交流協定を締結	56・11・1	創基百周年記念式典を挙行	
22・11・29	ハワイ大学カウアイコミュニティーカレッジと教育、学術に関する国際交流協定を締結	57・6・6	百周年記念資料館落成	
		60・4・1	文部省令第九号国立学校設置法施行規則の一部改正により、航海学科四〇名、機関学科四〇名、電子機械工学科四〇名となる 開学以来初めて女子学生の入学を許可し、航海学科三名、電子機械工学科三名、計六名の女子学生が入学 全寮制を基本として、一部について自宅または親戚等からの通学を許可	
		61・7・26	商船教育創始百十周年を記念する会を挙行 郵政省より同記念切手が発行される	
		62・3・30	電子機械工学科校舎落成	
		63・4・1	文部省令第七号国立学校設置法施行規則の一部改正により、商船学科四〇名、電子機械工学科四〇名、制御情報工学科四〇名となる	
		平成3・4・30	制御情報工学科校舎落成	
		4・3・21	正門付近環境整備完工	
		5・7・1	福利施設（潮騒会館）落成	
		6・8・19	練習船「鳥羽丸」（鋼船二四四屯）建造	
		12・11・20	職員宿舎竣工	
		13・11・9	創基百二十周年記念式典を挙行	

学生活動の紹介

全国商船高専漕艇大会を終えて

商船学科
航海コース5年
（カッター部前主将）
加藤　奨大

昨年11月21日に広島商船高等専門学校で第45全国商船高専漕艇大会が行われました。私にとっては、現役として漕ぐ最後の試合となりました。本大会は4連覇がかかっていたこともあり部員全員、相当なプレッシャーを感じていたと思います。そうした中で、A・Bチーム共に優勝することができ、本当に嬉しかったです。この大会は私の学生生活の中でも忘れられない思い出となりました。

カッターを通じて、物事を成し遂げることの大変さと喜び、またリーダーシップをとることの難しさと大切さを学ぶことができました。辛い練習を乗り越え、最後までついてきてくれた部員のみんなや、指導していただいた教官方、先輩方に心から感謝しています。

現在、カッター部は20人を超える新入部員を迎え、新たなチームで頑張っています。私もこれまでの先輩方同様、OBとして全力でサポートしていきたいと思っています。今年の漕艇大会は7月に鳥羽で開催されます。今年もまた、優勝旗を持ち帰ってきてくれることを信じて、応援しています。

全国商船高専漕艇大会を終えて

商船学科
航海コース5年
（ヨット部前主将）
岡野　歩

2010年の11月に広島商船で行われた第45回全国漕艇大会。私たちは、去年の総合3位という結果を上回ることを目標に、今まで練習に励んできました。レースで使うヨットは、各高専で2人乗りの「FJ」2艇、1人乗りの「SR」1艇です。そのためメンバーは部内で選抜し、4年生（現5年）を中心とした8人で大会に臨みました。

大会では、2日間、計5レースが行われました。実際にレースをする海面では風が弱く、また周辺の島々により、地形独特の不規則な風が吹いていたため、1つのミスが順位に大きく影響するという難しい環境下でのレースでした。その中でも私たちは、いままでの練習で積み上げた技術と経験を生かし、正確に風を読み安定して艇を走らせることが出来ました。その結果、FJ級、SR級ともに種目別2位となり、総合順位でもヨット部15年ぶりの2位となりました。これは目標を達成できたとともに、今までの努力が結果に結びついた証明となり、とても嬉しかったです。

しかし、成績の反面、レース中のミスや反省点も沢山見つかりました。そのため、さらにヨット部が成長するためには、一人ひとりの練習に対する意識が重要になると思います。

リーダーストレーニングに参加して

制御情報工学科4年
上野　珠あん

平成22年度のリーダーストレーニングは、12月17日から19日に岐阜の乗鞍青少年の家において実施されました。17日の22時頃、学校を出発してバスの中で一泊しました。途中4時間程サービスエリアでの休憩があり、学生は見慣れない雪にとても驚いていました。朝7時頃に青少年の家に到着し、入所式を行いました。午後からは、初心者から上級者の4班に別れてスキー・スノーボード研修が行われました。インストラクターの指導のおかげで、私はスノーボードがとても上達しました。夕食の後には夜の集いがあり、学生会と部活動の代表者に別れ、会議を行いました。その後、消灯時間まで体育館でドッヂボールや談話室で話などをし、1日目を終了しました。2日目の午前中はスキー・スノーボードの研修をした後、食事をすまし退所式を行いました。全ての計画をスムーズに実施でき、無事リーダーストレーニングを終える事ができました。

今後は、このリーダーストレーニングの経験を学生会活動・クラブ活動に生かしていきたいと思っています。学生会役員の皆様・部活動代表の皆様、本当にお疲れ様でした。

ハワイの海外インターンシップに参加して

商船学科
航海コース5年
大島　直紀

今年の3月、ハワイへの海外インターンシップに参加しました。参加した理由は自分の英語力を試すため、またハワイにはずっと憧れていたからです。

ハワイのカウアイ島に着いたときに迎えてくれたのは、広がる青空、背の高いヤシの木、少しむっとした空気と現地の方の手作りのレイでした。それからの大学での授業やビーチでの活動、ホームステイなどはとても楽しく、見るもの全てが新鮮で外国の異文化を存分に学ぶことができました。

しかし、ハワイ時間の3月10日、東日本大震災が発生し、私たちも津波のために高台へ避難しました。幸い被害はなく、参加者の家族も全員無事でしたが、日本がそのような危機の中楽しむことができるのか、という気持ちで一時は中止を検討しました。しかし、先生の「帰ってもできることは限られる。今ここでできることを未来に繋げるべき。」という言葉に励まされ、研修を続行することに決定しました。それからはその言葉を実行に移すべく学べるだけ努力しました。現地の方々も〝is your family OK?〟と心配してくださり、国境を越えて助け合うという気持ちのありがたさ、大切さを学べました。自分もこれから日本のため、世界のために頑張りたいと思いました。

オリエンテーションに参加して

電子機械工学科1年
舟戸　隆太

私たちは、4月21日から22日にかけて一泊二日の新入生オリエンテーションで曽爾青少年自然の家に行きました。入学して間も無い私たちは、友達も少なく不安な気持ちを持ちながらオリエンテーションに出発しました。昨年は雨だったそうですが、今年はとてもいい天気で、到着後、ハイキングに出掛けました。ハイキングでは班の人たちとの会話がはずみ、交流を深めることができました。私自身、海が近い土地の出身なので、山のハイキングは初体験みたいなもので、大変新鮮な気持ちでのぞむことができました。私と同じような気持ちを持った人も少なくないと思います。夜には班会議がありました。班会議とは各班が好きな議題を出し合い、それについて話し合うというものです。私たちの班のテーマは「高専生活を楽しむには」で、意見がなかなかまとまらず苦労しましたが、二日目の発表では各班すばらしい発表ができたと思います。このような体験を通し、仲間たちとの交流も深めることができ、本当に充実した二日間をすごすことができたと私は思っています。私たち新入生はこのオリエンテーションで学んだことを忘れず、これからの商船生活をすごしていきたいです。

体育祭を実施して

商船学科
航海コース5年
（体育祭実行委員長）
大田　大

みなさん、先日の体育祭、本当にお疲れ様でした。今年の体育祭も楽しんで頂けましたか？

今年の体育祭は、5月とは思えないくらい暑くて、真夏日のような日となりました。天候にも恵まれ、第9回体育祭「鳥羽商船だいうんどうかいでポポポーン」を開催することができました。前日は雨が降り十分に準備を行うことができず、不安が残りましたが、体育祭実行委員、学生会役員を中心に体育祭を進行し、鳥羽商船の学生みんなが体育祭を盛り上げてくれたので、けが人もなく、見事大成功を収めることができました。みなさん、ご協力ありがとうございました。

今年もM科が見事優勝、なんと4連覇を達成しました。本当におめでとうございます。私が今回の体育祭を進行していて、特によかったところは、各クラス、各学科で団結して勝利を勝ち取ろうとしている姿勢が見られたことです。M科はもちろんですが、S科、I科ともに、勢いでは負けていなかったと思います。各クラスが、この団結力でこれからも困難に立ち向かっていってほしいと思っています。

これからも学生会一丸となって、みなさんが楽しめるような行事を企画・実行していきたいと考えています。よろしくお願いします。

鳥羽商船における地域防災活動について

商船学科　境　善行

このたびの東日本大震災により被災された地域の皆様、関係の皆様に、心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

本校の地域防災活動については、平成19年1月に鳥羽市千賀地区で実施された「鳥羽市総合防災訓練」の参加から始まります。訓練内容は、本校の「鳥羽丸」を用いた救援物資の輸送及び海上での物資受け渡しでした。

阪神淡路大震災では災害発生時は道路が寸断されることから陸上輸送は難しく、船舶による輸送が見直されました。今回の震災でも、船舶による救援物資輸送の有効性が再確認されています。

鳥羽市は大地震や津波が発生すると、陸路が寸断され、陸の孤島となる恐れがあり、船舶が有効な輸送手段となりえます。

この防災訓練参加をきっかけに、平成18年9月1日に鳥羽市と「災害時協力協定」を結んでいます。内容は災害発生時における被災者救援のため所管する船舶の運航、要員の確保、避難住民の受け入れと支援、等となっています。その後、「災害時協力協定」は平成22年1月14日に志摩市と、3月3日に伊勢市と結んでいます。

本校は鳥羽市との協定を機に携帯電話以外の学校と船舶との通信手段の整備を平成19年から行い、平成20年6月に「業務用VHF（教育用）」（以下、VHF）の免許が交付されました。このVHFは、移動局を鳥羽丸やあさま、公用車に設置し、ハンディタイプも準備しています。平成21年1月の石鏡地区の鳥羽市総合防災訓練から、本校では業務用VHFを使用した情報の収集及び伝達訓練を実施しています。

鳥羽丸から漁船への物資受け渡しの様子

平成23年1月に小浜地区で実施された鳥羽市総合防災訓練の様子を報告します。訓練の目的は、大規模な地震、津波発生に伴う各種災害を想定して、地域住民はもとより防災関係機関が相互に連携し、各種訓練を実施することにより、地域の防災体制の強化と防災意識の高揚を図ることでした。

訓練参加・協力機関は、鳥羽市、消防、警察、海上保安庁、自衛隊、県の防災対策室、防災航空隊、医師会、漁協、自治会、救難物資提供の会社等、本校を含め計18の機関が参加し連携を図りました。本校は「鳥羽丸」による救援物資の輸送、及び受け渡し訓練に参加しました。（写真上）

一方で学内では教職員の通信実習を行いました。それは、災害発生時には情報の共有が重要となるからです。方法は現地に派遣した教員が収集した情報を、VHFを用いて本校の本部に情報を伝達し、本部から一斉に情報を配信し共有しました。（写真右）

訓練に参加し各種機関と連携を図ることができ、VHFが使用できる海域や場所が特定されるなどの成果を挙げることができました。

一方で、問題点も明らかになりました。各機関はそれぞれが無線を使用していました。しかし、同じ無線機を持っていたとしても、機関を超えて通信をすることができないことがわかりました。災害時には情報の共有が重要であることから、改善が必要と感じました。

今後も、本校は地域防災に協力をして、災害に備えてまいります。

業務用VHFを備えた実験室

新任挨拶

一般教育
小澤　裕香

今年度4月から一般教育の助教に着任いたしました小澤裕香と申します。出身は東京ですが、大学院修了を機に、三重県に引っ越してきました。今年2年目をむかえます。1年目は三重大学に勤務していたため津に住んでいました。自然が大好きなので海も山も楽しめる三重にどっぷりつかっています。伊勢湾での砂浜ランニング、美杉のアマゴつり、世界遺産・熊野古道にも行きました。もちろん、人の温かさも魅力の一つです。夏祭りや年越し行事など地域の人と一緒に取組んだことは大切な思い出です。海の幸も美味しいですね。鳥羽に来てからは〝とばーがー〟がマイブームです。

さて、本校の授業では現代社会、経済学、法学そして社会政策論と、社会科学全般を受け持ちます。私の専門は経済学で、なかでも厚生経済学・労働経済学の領域になります。これらを批判的に検討しながら、社会的・経済的な立場の弱い人も排除されないような再分配政策、雇用政策さらには福祉政策を模索しています。大学院博士課程在籍中には「社会福祉士」の国家資格も取得しました。福祉に関することで社会の役に立ちたいとの情熱が、研究に取組む上でのエネルギー源となっています。時折、この情熱が授業でも出てしまうようで、学生からは「教官の授業、熱すぎるー」と言われてしまいます。ともあれ、これまで授業の経験が十分にないため、授業づくりに試行錯誤の毎日ですが、みんなが「役に立って楽しいな！」と思える授業になるよう努力していきたいです。

最後になりましたが、1人ひとりの個性や、それぞれの成長のスピードを大切に見守りながら、みんなの学校生活を支えていけたらと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

平成23年度実施予定の公開講座

サイテクランド in 鳥羽商船

講　座　名	開催日時	受講対象者
●手作り太陽電池	7月28日(木) 7月29日(金)	中学生
●親子で電子工作	7月31日(日)	小学生親子
●Wiiリモコンでゲームプログラミング	8月1日(月)	中学生
●アマモ場から知る、伊勢湾の昔、今、未来 (JST：サイエンスパートナーシップ採択事業)	8月 2 日(火) 8月29日(月)(予備日)	小学4年生 ～中学3年生
●おもしろ理科実験	8月4日(木)	中学生

その他の講座

講　座　名	開催日時	受講対象者
●みえアカデミックセミナー　2011	7月9日(土)	一　般
●海洋体験教室（in 四日市港） http://www.yokkaichi-port.or.jp	8月6日(土) ～8月7日(日)	小中学生・一般
●小学生のためのバレーボール教室	10月13日(木) 20日(木)･27日(木)	小学生・一般
●練習船「鳥羽丸」による名古屋港 PR活動及び一般公開	11月初旬2日間予定	小中学生・一般
●ロボコン講座（日本橋ストリートフェスタ）	3月20日(火) 春分の日	一　般

平成22年度卒業証書、修了証書授与式を挙行

平成22年度電子機械工学科・制御情報工学科卒業証書授与式並びに専攻科（生産システム工学専攻）修了証書授与式が、去る３月４日（金）10時30分から本校第２体育館において挙行された。

藤田校長から、卒業生一人一人に卒業証書が授与され、来賓、保護者、教職員及び在校生から祝福を受けて、学窓を巣立っていった。

平成23年度入学式を挙行

平成23年度入学式が去る４月６日（水）10時から本校第２体育館において挙行された。

商船学科44名、電子機械工学科35名、制御情報工学科46名の計125名の本科新入生、専攻科生産システム工学専攻に13名の新入生を迎えた。

教職員の人事異動

（平成22年12月31日付け）

【職　員】

○退職

松田　晴男（学生課課長補佐）

（平成23年３月31日付け）

【職　員】

○退職

上野　栄子（学生課学生生活係長）

嶋岡　尚美（総務課財務・経理係財務主任）

上村　栄一（テクノセンター再雇用職員）

○転出

・三重大学学術情報部研究支援チーム副課長

水谷　隆志

（総務課課長補佐（総務担当）（企画室長兼務））

・三重大学施設部施設管理チーム

伊達　謙一（総務課施設係）

（平成23年４月１日付け）

【教　員】

○採用

一般教育　助教　　**小澤　裕香**

○転入

商船学科（機関コース）准教授

小川　伸夫（長岡工業高等専門学校）

【職　員】

○採用

・総務課課長補佐（総務担当）（企画室長兼務）

塩崎　克好（三重大学生物資源学部・生物資源学研究科チーム係長）

・学生課教務係長　　**東川　さゑ子**（三重大学人文学部チーム主任）

・総務課施設係施設主任　**竹内　晃輔**（三重大学施設部）

・学生課入試・支援係入試・支援主任　**別宮　剛**

（森林総合研究所森林農地整備センター

東北北海道整備局南富良野建設事務所工事第一係長）

・総務課財務・経理係　**山村　優美**

・総務課人事労務係（事務補佐員）　**野瀬　幸子**

編集後記

今年、本校が創基130周年を迎えるにあたり、『学校だより』第74号を「創基130周年記念」の号として編集することになりました。この記念号の表紙を飾るのは、昭和42年６月１日の高専昇格前の本校全景写真（上）と、明治23年２月15日に印刷され、本校もその中に描かれている「志摩囡鳥羽港　日和山眺望眞景」と題する絵図の一部（下）です。今号には他にも数々の資料が掲載されており、改めて本校の長い歴史を感じます。そうした伝統を基に、これからの鳥羽商船高等専門学校を私達みんなで創っていくわけですが、この『学校だより』がその一つの契機になればと思います。記念すべき節目の号に原稿や貴重な資料をお寄せ下さいました方々に対し、この場をお借りして心よりお礼を申し上げます。

（岸川記）

学校だより Vol.74
平成23年7月発行　鳥羽商船高等専門学校　広報・公開委員会「広報誌専門部会」
三重県鳥羽市池上町1番1号　TEL 0599-25-8013　http://www.toba-cmt.ac.jp